

# — 上智大学 —

2月4日 総合人間科・外国語・神学部 国語

## 解答

一

問一 c、e      問二 d      問三 b      問四 c      問五 b  
問六 d      問七 a      問八 c      問九 b      問十 a、d

二

問一 c      問二 d      問三 c      問四 b      問五 c  
問六 c      問七 c      問八 c、g  
問九 b

三

問一 1a 3d 4b      問二 c      問三 c      問四 b      問五 a  
問六 b      問七 c      問八 c

その他の大学・学部の解答解説はコチラ！

[増田塾 2019 解答速報ホームページ](#)

早慶上智・GMARCH・関関同立などをはじめとした難関大学の解答解説を随時公開していきます！

## 解説

□

※説明の際は本文全体を通しての行数で「○行目」というように説明箇所を示していく。この大問□本文はAが全36行、Bが全19行となっている。設問の問一～問七はA文、問八～九はB文における行数とする。

問一

上智大学を受験する生徒であれば、「演繹法」と「帰納法」は知っていなければならない現代文用語である。本文の中では4行目「普遍的命題から～個々の定理を導き出す」が「演繹法」の説明としてわかりやすい。この内容に対応するのはcとeであり、この2つが正解。eはいわゆる「三段論法」であるが、三段論法は演繹的推論を具体的に定式化したものである。ちなみに、aとdは帰納法、bは一見演繹法に見えるが前半部分が「普遍的命題」とは言えないので除外すべき。

問二

傍線部2直前に「結論は前提のうちすでに暗示的に含まれていたものを明示的に取り出したもの」と書かれている。これに最も近いのはdで、これが正解。aは「幾何学的証明にのみ必要」という限定が2、3行目「演繹法」の「典型」が「幾何学的証明」だ、という内容と矛盾するので×、bは「前提との関係が必然的でない」が本文5、6行目「前提が正しければ、結論は必ず正しい」と矛盾するので×、cは演繹法ではなく「帰納法」の説明になっているので×。

問三

空欄Xの説明は、直前「有限から無限への推論」、空欄の次行17、18行目「帰納的論証の結論は～蓋然的な主張にとどまる」に書かれている。つまり有限の観察的事実をもってすべてに当てはまる(＝普遍的である)と判断してしまう、ということ。ここには論理的飛躍があるとわかるので、正解はbである。空欄Xは「帰納法」の説明なのだから、aは真逆で×。c「幾何学的証明」は2、3行目より「演繹法」の典型なのだから×。dは15行目より「帰納法」の前提となるものであるから×。

問四

傍線部4の理由は、傍線部直前に「科学理論を構築する基盤である帰納法が蓋然的な結論しかもたらさない」、20、21行目にも「原因と結果の結びつきは～『心の習慣』にすぎない」と書かれている。この内容に最も近いのはcで、これが正解。「蓋然性」は「確からしい」という意味なのでcの「正当な根拠がなく」と対応する。aは「演繹法」の説明なので×(ヒュームが科学知識を疑ったのは、科学理論の基盤が帰納法だからである)、bも「その結果得られる個別的命題」が4行目より「演繹法」の説明なので×、dは35、36行目に書かれてはいるが、傍線部と直接因果関係(理由)としてつながる内容ではないので×。

## 問五

傍線部 5 直後に「科学が経験科学である限り～演繹的論証のみに頼ることはできない」とある。「演繹のみに頼ることはできない」ということは「帰納法が必要」ということである。つまり「経験科学には帰納法が必要だ」ということになる(設問でも「帰納法なしで済ますわけにはいかない理由」＝「帰納法が必要な理由」があきらかに問われている)。「帰納法が必要だから」と言っている選択肢は b だけであり、これが正解候補。さらに b 前半は本文 7 行目(傍線部 2)に、b 後半は 10 行目に書かれており、内容面でも正しい。よって b が正解。a は「帰納法」の「不十分さ」を説明しているだけで「帰納法」が必要であることの理由になっていないので×、c は「演繹法だけでは」「蓋然的主張を～導くことができない」という意味になるが、これでは「帰納法ならば蓋然的主張を論理的に導ける」ことになってしまい、10、11 行目、また 17、18 行目に矛盾するので×、d は単に「帰納法」の説明をアリストテレスの引用で示しただけで、「帰納法が必要」という説明になっていないので×。

## 問六

傍線部 6 の説明は 29、30 行目「自然界を観察して～繰り返されると考えてよい」、30、31 行目「自然は統一ある秩序～妥当な結論を導く」に書かれている。この 2 つの内容に最も近いのは d であり、これが正解。a 「どのような条件下でも同一の現象が～生じる」、c 「現象が一様に生じている」が 29、30 行目「同じような状況のもとで一定の現象～繰り返される」と矛盾するので×、b は「蓋然的結論を支持している」が×。傍線部 6 「自然の斉一性」とは、帰納法が蓋然的結論しか導けないとなると科学の信頼性が落ちるので、自然の斉一性によって帰納法が十分に信頼できるものだ、と説明するためのものである。「蓋然的結論を支持する」では信頼性が低いままでよい、ということになってしまう。

## 問七

空欄 Y 直前の「帰納法の妥当性を保証する～ために帰納法を必要とする」より、正解は a の「循環論法」。「循環論法」とは、「証明すべき結論を前提に用いる論法」のこと。上記の通り「帰納法を保証するために帰納法を必要とする」のは「循環論法」に陥っている。

## 問八

「帰納法」から「演繹法」へ＝「個別→普遍」から「普遍→個別」という流れが正しく書かれているものを選ぶ。a は半ばあたりの「帰納法によって必然的に導く」が×。「帰納法」は「蓋然的」なものである(必然的なのは「演繹」)。b は後半の「演繹法によって新しい知識を獲得」が×。これは「帰納法」の説明である。c は「帰納法」を「観察→普遍」、「演繹」を「普遍→個別」と正しく説明しており、これが正解。d は半ばあたりの「帰納法によって普遍的命題から個別的命題を導き出す」が×。これは「演繹」の説明である。

## 問九

傍線部 9 「仮説」の説明箇所は、16、17 行目「予測のつかない～仮説が反証される可能性は常に残っている」、18、19 行目「科学理論や科学法則は永遠に『仮説』の身分にとどまる～身をさらしている」である。さらに 17、18 行目「自然科学の法則に数学や論理学と同等の論理的必然性を求めることは無いも

のねだり」より、「自然科学による仮説」は「数学や論理学」と対比的であることもわかる。以上の内容に最も近いのは b であり、これが正解。a は「仮説演繹法」の説明として「演繹によって～」と演繹のみにしか触れていない点で×。5 行目以降にあるように(1)～(2)は「帰納法」であり、これに触れずに(2)～(3)「演繹法」に進むことはできない。c は「仮説演繹法」を「数学や論理学の定理に対しても～」と並列的(つまりイコールとして)とらえている点が 17、18 行目と矛盾するので×。d は後半の「実験による検証」を「不必要」としている点で×。「仮説演繹法」には 8 行目(4)にある通り「実験的検証」を含むし、そもそも 5、6 行目にある通り(1)(2)は「帰納法」を前提にしているのだから d 後半はおかしい。

#### 問十

a は A 文 35、36 行目より合致しない。正解の 1 つは a である。b は B 文 11、12 行目より正しい。c も B 文 17、18 行目より正しい。d は B 文 2、3 行目より合致しない。これが正解の 2 つ目。e は A 文 10、11 行目より正しい。よって正解は a と d である。



#### [口語訳]

(逃げようとする法師を隨身が捕らえようとしたが、狭衣が「追いつめるな」と声をかけたので)法師は逃がして(しまい、その場に残っていた)牛飼童を捕らえて「(あの法師は)何者だ」と(隨身＝波線ア主語が)問いつめると、「(あの方は)仁和寺で威儀師をつとめております僧です。長年懸想していた人(＝波線 Q。この「人」は今車の中に取り残されている女性を指すことになり、問九で出題された傍線部 6 の「人」と同一人物である)が、数日来太秦(の広隆寺)に籠りなさっていたのですが、(広隆寺から)お出になるといって車を所望なさったところ、(僧は)喜びながら車を差し上げなさって、姫君を盗んで(＝誘拐して)連れていらっしやったのです。法師だというのにこのように強引なこと(＝姫君を盗みだすこと)なんてするから、仏が怒りなさってこのような目(＝法師一行が今遭遇している目、要するに狭衣一行との間にトラブルが起きている現在の状況)を(私たちに)お見せになっているのでしょうか。(私たちの車の牛は)荒牛であって(本来なら、もっと)抑えたりして寄るはずのところでしたが(法師が)長年の念願(＝懸想していた姫ゲット)叶って急いで連れ帰ろうとするときに(法師のセリフ＝)『どうせ向こうは、こちらの車を)女車と見ているだろう(だから少々の無礼があっても大目に見てくれるだろうから、別に構うもんか、いいから)早よ行け』と(私・牛飼を)責めるので、『師には従う』という教えを僧の所で数年来(働いて)いた影響か聞き知っておりましたので(僧が)おっしゃるままに車を走らせました(＝要するに私は師に従っただけです...、本当はしたくなかったのに...という言い訳)。今後はもう(私・牛飼は)決してこの師(＝この場から逃げ出した、仁和寺の威儀師である法師)にはお仕えしないつもりです」と(隨身たちに咎められるのが)恐ろしく悲しいと思っている(牛飼の様子)が、たいそうおかしくて(隨身＝波線イ主語は、牛飼を)許してやった。

君(＝狭衣を指す)に「(牛飼は)このように申しております。車の中には本当に女の人(＝僧にさらわれてきた女君)がいる模様です。法師(たち一行)も皆逃げました。このような状態で(この女の人を)放置しておくのはかわいそうではないでしょうか」と(隨身＝波線ウ主語が)申し上げると、(狭衣のセリフ＝)「どうして(おまえたちは)こういうことをしてしまうのだ。いつも(私・狭衣＝波線エ主語、問二で「他の三つと異なる主語として正解となる」が、おまえたち隨身の過剰な行動を)制するのも聞かないで(勝手なことば

かりするからこういうことになるのだ)。(そうはいつでも、この女性が)行かなければいけない所(=本来帰るはずだった家を指して言っている)はどこであろうかな。どうして、放っておけよう(いや、たしかにこんな所には放っておけない)。その童(=牛飼)に(女君の本来帰るべき家を)聞いて(車の中の姫君を家まで)送ってやるように」とおっしゃって過ぎなさと(隨身が)また(狭衣の所に)参上して「姫君の家は、二条大路の近くにあるようです。暗くなるにつれてひどくお泣きになっています。いかがいたしましょう。童(=牛飼)も(師である仁和寺の威儀師が)どっちに逃げたか知らないようです。(ですが)そうはいつでも今に車を取りに当人(=法師)が戻ってくるでしょう。(きっと法師は)この近くに隠れているでしょう。(火を灯すための)松を持ってまいりませんでしたので(辺りが)暗くなってきました(ので、もうこのへんで)車を出しましょう」と言うが、(以下、狭衣が女君に対してどう対処すべきか悩む心の中=)「(女君の乗っている車は)あの車だろうか、(女君は)どのような人だろうか、(でも逆に、今起きていることが)本当に心外なこと(=つまり、誘拐などではなく、実は法師と示しあわせて寺を脱出しただけ)であったりしたら(この事態は)どれほどつらいことであろう。(こんなに)暗い夜道の途中で一人きりにさせられていることよ。(けれども)このまま見捨てては、さっきの法師が戻ってきて(女を)思いどおりにするかもしれない(=狭衣には、まだ詳しい事情がわかってないので、正反対の想像をいったりきたりしている...)」と思うと心配だが、どこに(女君を)送り届けたらよいかは知らないで「我が邸に、今夜だけでも連れて行って、置いておこうか」とも思うが、(逃げる時に)袈裟を被って走り去った法師の様子を思い出す(=逃げた様子そのものは、カッコわるく思っている)ものの(そうはいつでも)やはり法師なのだから(ある程度は)立派(なはず)なのではとも思う。そうはいつでも、このまま(女君を)見捨てるのはかわいそうで、(また、もしかしたら法師が、ここまでくる)道の途中(の車の中)で(すでに女君に)手出ししたのかと思うと不愉快で忌まわしく、(以下は、再び狭衣の心の中=)「我が邸に泊めよう。(女君にとっては、この件に関するさまざまの事情が)語りにくくもあらうと思われるが、やはり(その女君は)どんな身の上の人なのだろう」と知りたくて、(もと乗っていた狭衣自身の)車を引き返し、あちら(=女君が乗っている車)に乗り移って御覧になると、衣を被ってお泣きになっている人(=傍線部6の「人」。ここまでのストーリーでずっと話題になってきた姫君・女君のことである)がいた。

#### [設問解説]

#### 問一

a「車を借りた」のは「法師」でなく「姫君」の側である。b「心配で」「法師は仁和寺を出るために車を借り」「牛飼童も喜んで協力し」が全て誤り。d「姫君だけを車に乗せ」が誤り。法師も、姫が乗っている車に「同乗」しているcが正解となる。

#### 問二～問四

[口語訳] で確認のこと。

## 問五

[口語訳] も参照。

ストーリーを考えればありそうなのは **b** か **c** だが、**b** の「反省し、申し訳なく思っている」と確定できる根拠がない。ようは、自分(童)は師に従っただけです...というのが牛飼童の言い分(言い訳?)なのである。

## 問六

二重傍線部 **M** 「んずる」は、助動詞「んず(=むず)」の連体形。残る三つは全て終止形である。

## 問七

[口語訳] も参照。どこに行ったか分からないのは、逃げてしまった「法師」である。また「らん」は現在推量の助動詞で「今ごろ法師がどこに行ってしまうのか分からない」という解釈で、**c** ならばこれにあう。**d** だとすれば、これから逃げ出す(?)という「未来」の状況を指すことになってしまい、この点もあわない。

## 問八

[口語訳] も参照。

**c** が「適切でない」ときめるのは比較的容易。まさか法師が逃げ去る様子を見て「風流」と感じたわけではなかろう。悩ましいのは **b** と **g** であるが、まず **b** について。法師が悪者(?)かどうかは、そもそも部外者であるはずの狭衣にとって、この時点ではまだ確定しているわけではない。ひょっとしたら法師が逃げてしまったことの方が女君にとってはマイナスだった可能性もなくはないはずである(つまり、真相は誘拐ではなく、示し合わせてそういうフリをしている可能性だってある)。だから狭衣は「まことに心ならぬことならば、いかばかりわびしからん」と、こちら(狭衣側)の思い込み(?)がもし真逆だったら...と考えたわけである。これが **b** にあたっている(以下は参考。出題された本文にはないが、これに続く場面で、狭衣は「本当に不本意な誘拐であって、示し合わせてやっているわけではないのですね」という主旨の質問を女君にしさえする)。**g** は「飛鳥井に宿りせん、語らひにくく思さるれど」と本文にあり、一見「自宅に泊めること」と「語りにくいこと」が結びついているかのように誤解しそうであるが、この「語りにくい」は、女君にいろいろと事情を尋ねても...ということにかかる(だって、車中で法師に何されたかわからないし、こういうことになるのに何か込み入った事情があるのかもしれない)。よって「適切でない」のは **b** ではなく **g** の方となる。

## 問九

[口語訳] で確認のこと。

### 三

#### [出典解説]

「永某氏之鼠」は柳宗元が書いた『三戒』に含まれる寓話の一つ。一見するとただの鼠の話だが、実はたとえ話になっており、人民の苦しみを顧みることなく、飽食し好き放題の封建支配階級の醜悪な行状を鼠を借りて風刺し、やがては滅亡する「驕れる者久しからず」の理を説いている。なお残る二つの話（「臨江の麋(び)」「黔(けん)の驢(ろ)」）も同様に、人間の行状を動物に仮託した寓話である。以下に参考として『三戒』の序文の書き下し、並びに口語訳を掲げる。（『三戒 序』の書き下し＝）「吾恒に世の人の、己の本(もと)を推すを知らずして、物に乗じて以って逞しゅうするを悪(にく)む(＝この箇所が問七の正解となる c の選択肢にあたっている)。或いは勢いに依りて以ってその類に非ざるを干(おか)し、技を出して以って強を怒り、時を竊(ぬす)みて以って暴を肆(ほしいまま)にす。然れども卒(つい)に禍いに迫(およ)ぶ。客有りて麋(び)驢(ろ)鼠(そ)の三物を談ず。その事に似たれば、三戒を作る。」(同口語訳＝)「私(＝柳宗元)はいつも世の中の人が、自身の本分をわきまえないで、他を頼り気ままに振舞っているのを憎んでいた。或る人は勢いに乗じて親しくもない人のところにおしかけたり、稚拙な能力を過信して、優れた人に腹を立てたり、あるいは隙を窺って乱暴の限りをつくす。しかし結局は禍いに遭ってしまうのだ。(私の所に)ある客が来て、馴れ鹿と驢馬と鼠の話をしていった。その三者が世の人の様に似ているので戒めとした。」

#### [本文(「永某氏之鼠」)の書き下し]

永に某氏なる者あり。日を畏れ忌(い)みに拘わること異(こと)に甚だし。以為(おも)えらく、己の生まれ歳は子(ね)に直(あた)り、鼠は子の神なりと。因りて鼠を愛して猫犬を畜(やしな)わず。僮(どう)に禁じて鼠を撃つこと勿(な)からしむ。倉廩庖廚(そうりんほうちゅう)悉(ことごと)く鼠を恣(ほしいまま)にするを以って問(わ)わず。是(これ)に由りて鼠相告げて皆某氏に来る。飽くまで食らうに禍(わざわひ)無し。某氏の室に完器無く、櫛(い)に完衣無し。飲食は大率(おおむね)鼠の余りなり。昼は累累と人と兼ねて行き、夜は則ち竊齧鬪暴(せつげつとうぼう)す。その声、万状にして、以って寝(い)ぬるべからざるも、終に厭(いと)はず。数歳にして某氏徙(うつ)りて他州に居す。後の人來たり居するに、鼠の態たるや故(もと)の如し。その人曰はく「是れ陰類の悪物なり。盜暴尤も甚だし。且つ何を以って是(ここ)に至れるや」と。五六猫を仮り、門を闔(と)じ、瓦を撒(ひら)き穴に灌(みずそそ)ぎ、僮を購(あがな)ひてこれを羅捕(らほ)す。鼠を殺すこと丘の如し。これを隱処に棄つるに、臭(くさ)きこと数月にして乃ち已(や)む。

#### [本文(「永某氏之鼠」)の口語訳]

永州の或る人は、日々の吉凶を恐れ憚る(＝要するに、縁起・験をかつぐ)人で自分が子年(＝ネズミ年)の生まれなので、鼠を神の使いと思って大事にした。犬猫は飼わず、下男に命じて鼠を殺すことを禁じた。倉、炊事場、米倉と鼠の出入りをお構いなしとした。この(＝ここまで挙げられた理由全体を指す)ため、鼠たちはお互いに呼びあって某氏(の家)に集まった。(鼠たちは)飽食したとしても(それに見あうような)禍いがなかった。某氏の部屋に(齧られていない)完全な食器(＝「器」は調度品・家具という解釈も可能だが、上智の出題・選択肢にあわせて、あえて今回は「食器」と訳した)はなく、衣類掛けには(齧られていない)完全な衣類はなかった。飲食は鼠の食べ残しであった(＝要は人間が食べるよりも先に必ず鼠に

齧られてる...ということ)。(鼠は)昼は人と一緒に往き来し、夜になれば盗み齧り乱暴狼藉、そのやかましさに(人間の側は)眠ることさえできなかつたが(それでも)まったく気にすることはなつた。数年後、某氏は他の州に引っ越した(=ネズミ屋敷は空き家になつたということ)。後の人(=永氏の次の人)が(同じ屋敷に)やってきて住んだが以前と同じ(鼠たちが、やりたい放題の)状況だつた。その人(=新しく住んだ人)が言うことには「これ(=鼠)は陰に棲む生き物の中で最も悪いものだ、ここまで甚だしいとは、一体どうしてこのようになってしまったのだろうか」(そこで鼠を捕らえるために)猫を五六匹借りてきたり、(鼠の)逃げ道を塞いだり、屋根の瓦をはがしたり、巣穴に水を注いだりした。さらに下男を雇い鼠を捕えさせ、殺させたところ(山積みになつた鼠の死骸は)丘のようで、これを邪魔にならないところに棄てたが(死骸から出る)臭いは数ヶ月経ってやっと消えた(=消えた...ことの方でなく、数か月も続いた...ということの方を強調している)。

[設問解説]

問一

1=「畏」は「畏(おそれる)」、「拘」は「拘(こだわる)」だが、なぜ某氏が鼠を大切にするようになったかの理由につながるものを選びたい。「子」は「子(ね)」であり「某氏がネズミ年だから」である。3・4 = [本文(「永某氏之鼠」)の口語訳]も参照のこと。

問二

「是」の前にある複数の理由全てにかかるようにするためにはcでなければならない。a・bは、それぞれ理由の一つに過ぎない。

問三

a「住人が変わったことに気付かず」には根拠がない。逆に「住人が変わった」ことを鼠たちが意識している(?)のもヘンなのでbも不正解。d「自分達が駆除される存在」とは、鼠たちは、そもそも思っていないはずなので「忘れ去って」という言い方はあわない。ようするに鼠たちは惰性でこれまでの生活を続け、自分たちに禍がくるとは思わなかつた...というのである。以下は参考。出題された本文では省略されているが、実は「永某氏之鼠」には、この後さらに結末として以下の一文が続くのである。「嗚呼、彼その飽食して禍無きを以て恒にすべしと為したるか(ああ、どうして彼ら(=鼠たち)は飽食を続けて、いずれ禍いがくることを思わなかつたのだろうか)」



## 問四

問一 1 の解説に書いたことを参照。逆にこの設問の選択肢(「辛亥」「甲子」「戊辰」「乙巳」)を、問一 1 のヒントとして利用する(=ひょっとして、この問題、ナニ年っていうのが関係してる?...と気づく)こともできた(ちなみに亥はイノシシ、辰はタツ、巳はヘビ...である)。

## 問五

「而」は、順接にも逆接にも使えるが、波線部 Y は逆接である。飽食した「のにも関わらず」禍はない...という文脈。これと同じなのは a。貧しい「のにも関わらず」怨まない(のは難しいことだ)。

## 問六

[本文(「永某氏之鼠」)の書き下し] 及び [本文(「永某氏之鼠」)の口語訳] で確認のこと。

## 問七

正解となる c の意味は [出典解説] に掲げた「三戒 序」の書き下し、並びにその口語訳を参照のこと。なお a は論語にある孔子の言葉、b は史記にある有名な言葉(天道是か非か)で、本文とは全く関係がない(時代から言っても、いずれも本文よりかなり古い)。d を書き下せば「噫(ああ)、形の尫(たか)きことは有徳に類し、声の宏(おお)いなるは有能に類せり」となる。訳すと「ああ、外見が立派だと徳を備えているように見えるし、声の大きいと能力がありそうに見える」となるが、鼠の話とはあまり関係なさそうである。以下は参考。実は d は「永某氏之鼠」以外の「三戒」にある寓話の一つからとられている(=「黔の驢」)。[出典解説] も参照)。ザンネンな驢馬さんが見掛け倒しの無能っぷりを虎に見破られて食べられる...というあまりテンションの上がらなさそうな話である。

## 問八

柳宗元は中唐の時代の文人・政治家であり、唐宋八大家(とうそうはちたいか・はちだいか)の一人に数えられる。唐宋八大家は、散文における唐代・宋代のもっとも優れた作家八人の総称である。柳宗元以外の七人は、同じく唐の韓愈(かんゆ=これが正解となる c の選択肢)、宋の欧陽脩(おうようしゅう=b の選択肢)・蘇洵(そじゅん)・蘇軾(そしよく=d の選択肢)・蘇轍(そてつ)・曾鞏(そうきょう)・王安石(おうあんせき)である。a の「杜甫(とほ)」は、柳宗元と同じ唐代とは言えるが、若干時代がずれる(杜甫は盛唐で、杜甫の方が柳宗元よりも古い)。また杜甫は詩人であって、散文の大家である柳宗元を、これと「並び称された」とするのは、いくらなんでも強引過ぎる。e の「司馬光(しばこう)」は北宋の時代の歴史家である。

**その他の大学・学部の解答解説はコチラ！**

**増田塾 2019 解答速報ホームページ**

早慶上智・GMARCH・関関同立などをはじめとした難関大学の解答解説を随時公開していきます！